

核心に迫る重要な「調査報道」

表題は朝日新聞 10 月 20 日朝刊の中島岳志さん「わたしの紙面批評」である。関心あるテーマなので要約しておきたい。写真は朝日新聞 2014 年 5 月 3 日掲載の安倍首相と岸元首相である。

圧倒的な速報性をもつインターネットが定着した今、「調査報道」こそが新聞ジャーナリズムの生命線だろう。政府や警察が提供する情報をそのまま報じる「発表報道」がメディアを覆う中、各自の視点や問題意識による取材を通じて真相に迫る「調査報道」の重要性はますます高まっている。

「調査報道」の成果は、時にスクープとして華々しく発表される。しかし、取材者ならではの情報をもとに、埋もれた事実を掘り起こす特集も、立派な「調査報道」である。2014 年 4 月から翌 3 月まで連載された「検証 集団的自衛権」はその典型であり、現場記者でなければつかむことのできない政治過程を活写した力作だった。

現在進行形のシリーズに「70 年目の首相」がある。現在「系譜編」「思想編」「苦闘編」までの 3 部が終了し、近日中に第 4 部「アベノミクス編」がスタートするという。このシリーズは政治家・安倍晋三の核心に迫る重要な「調査報道」である。

プロローグを含む「系譜編」は、安倍の行動原理のルーツを母方の祖父・岸信介に求める。岸は商工官僚として満州に赴任し、満州国の最高幹部として働いた。取材者は中国東北部に渡り、足跡を追うが、残念ながら記述が散漫で核心に迫ることができていない。岸の満州体験と安倍の政治原理の何が連続しているのかが判然としない。岸が満州で行った設計主義的な社会改造が、安倍政治といかなる繋がりがあるのか？ ポイントは岸の統制的で社会主義色の強い政治姿勢の分析だろう。岸を保守政治家と見なすことは難しい。



岸と安倍の連続性。その中心は、東京裁判への違和感と憲法改正への情熱だろう。この点を丹念に追っており評価できる。一方、両者の相違として対米認識を取り上げている点も重要だ。岸が反米意識を根底に据えた「戦略的同盟論」だったのに対し、安倍にはアメリカへの賛辞が目立つ。そのズレを、岸の戦犯容疑者としての獄中経験と、安倍の米国への留学経験の相違に見出している点は面白い。

「苦闘編」は政権を投げ出した後の安倍が、自民党総裁に返り咲くプロセスを描く。その過程で政治評論家やタレントの果たした役割を強調し、大阪のダブル選挙で勝利をおさめた「維新」との関係が、存在感を示すうえで重要な役割を果たしたことを指摘する。安倍政権の背骨を巧みに描いており必読である。

今後も「調査報道」の名に値する企画シリーズを期待したい。その際は、明瞭な文体を心がけてほしい。

(2015 年 11 月 3 日)